

地に降りた神々

卑弥呼伝説

井沢元彦

実業之日本社

卑弥呼伝説 地に降りた神々

一九九一年 六月十五日 初版発行

著者 井 沢 元 彦

発行者 増 田 義 和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(三五六)二〇五(編集)

〇三(三五三)四四四(販売)

振替東京一―三二六 一〇四

支局 大阪市北区曾根崎二―十二―七

梅田第一ビル内

TEL 〇六(三一二)一五七三

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

ISBN4-408-53150-2

©M.Izawa 1991

Printed in Japan

卑弥呼伝説 地に降りた神々 ● 目次

プロローグ

第一章 神の密室

第二章 ヒムカとトヨ

第三章 吉野ヶ里の幻

第四章 岩戸神話の謎

第五章 アマテラスの正体

第六章 敵

第七章 出雲四柏手

314 254 198 133 99 39 6 5

装帧／道信勝彦

卑弥呼伝説 地に降りた神々

プロローグ

闇の中で一群の男女が踊っていた。

初めは、ゆるやかに、そして、激しく。

その中心の女が、いきなり着ているものを脱いだ。
どこからか不思議な楽の音が聞こえてくる。

女は女豹のような目を、神のいる場所へ向けた。

第一章 神の密室

まるで海鳴りのように遠くで音がした。

その音は次第に大きく強く耳の底で響いた。

意識の混濁の中で、音は明確に形を取りつつあった。

その時、永源寺峻えいげんじしゅんは目を覚ました。

電話が鳴っている。その隣に置かれたデジタル時計は、闇の中に二時という時間を告げていた。

峻が受話器に手を伸ばした時、意識はまだ完全に戻っていなかった。

——はい。

寝ぼけ眼で返事をした峻の耳に、心をしめつけられるような、かぼそい声が聞こえてきた。

——ヒミコは殺された。

——うん？

とつさに相手の言うことが理解できなかったが、声に聞き覚えはあった。

——日向か、どうしたんだ？

答えはなかった。その代りに信じられないほどの苦しげなうめき声が聞こえた。
峻は今度こそ完全に目を覚ました。

——おい、どうしたんだ、おい、しっかりしろ。

返事はなかった。

峻は跳び起きて、もう一度呼びかけた。しかし、電話はつながっているのに、何の返事もない。受話器の向う側には無気味な静寂があるばかりだ。

ほんのわずか躊躇の後、峻は一度電話を切って警察にかけ直した。

——友人の様子が変なんです。見に行つて頂けますか。私は——。

峻は手短かに依頼すると、急いで着換え、車のキイを持つて部屋を飛び出した。

日向忠太の死体は東京世田谷区太子堂の閑静な住宅地にある奇妙な一軒家で発見された。

発見したのは峻の通報を受けて駆け付けたパトロールの警官である。

それはまったく奇妙な家だった。いや、家というより神社といった方が正確かもしれない。鳥居をくぐると石畳の道がわずかに続き、真新しい杉の板で作った神殿形の建物が建っている。階があり、周囲は濡れ縁で囲まれている、床の高い木造の建物だ。屋根は瓦ぶきで屋根の中央の盛り上った部分には銅の宝珠がある。

ただ、よく見ると、いわゆる神社の社殿とは少し違って、正面の入口が観音開きの扉ではなく、引戸ひきどになっている。両側の壁にはガラス窓がある。ただしカーテンが引かれ中の様子は見えない。

若い警官はパトカーを降りるとすぐに鳥居をくぐって、その建物を目指した。通報によって、それが神社ではなく人の住む家であることは知らされていた。彼はまったくすぐに階を上って、正面の戸をノックした。

「日向さん、日向さん、大丈夫ですか」

声をかけると同時に、引戸に手をかけてみたがまったく動かない。

返事がないので警官は濡れ縁を右へ回って、ガラス窓を叩いた。分厚いカーテンを通して中から光が漏れている。

返事はない。

警官はふと、左の隅のカーテンが少しずれているのに気が付いた。ほんの一センチほど隙間があつて中をのぞくことができる。

のぞいてみて警官は思わず叫び声をあげた。

八畳ぐらいの広さの板敷の床の中央に、白い単衣に袴をつけた男が、仰向けに倒れていた。左手には電話の受話器を握りしめている。そして、右手は胸元にあり白い矢羽のついた矢を握りしめている。

その矢は男の胸にしっかりと突き刺さり、男の衣は暗紅色の血に染まっていた。

警官は泡を食って、急いでパトカーまで走ると、無線で応援を頼み同僚を伴って戻ってきた。

「ねえ、先輩、死んでるでしょう」

若い警官は和田といった。その二年先輩の江藤は、ガラス越しに見て、やはり死んでいると確信した。だが、たとえ生存の可能性が万に一つもなくとも、このまま応援の到着まで手をこまねいているわけにはいかない。

「中へ入るぞ」

江藤は宣言して、警棒でガラスを叩き割り、掛け金はずして中に入った。そして、引戸を中から開けて和田を招じ入れた。引戸には錠はなく、ただ内側から心張り棒がかけてあるだけだった。江藤はそれはずしたのである。

和田が中に入った時、江藤はもう男の脈をとっていた。

そして首を振った。

「だめだ、完全に死んでいる」

そう言つて江藤はきよろきよろとあたりを見回した。

部屋は八畳一間ぐらいの広さで、ほとんど家具らしい家具はない。ほぼ中央に和机があり、その上には電話機と電気スタンド、開いたノートとペンが置かれているだけ、あとは本棚に大量の書物が積まれている。普通の本だけでなく和綴の古文書も多数ある。そして隅の方に布団がたたんで置かれている。

天井からの蛍光灯で部屋は明るいが、それだけに家具の少なさが目立つ。

江藤はまるで人を捜すような視線をしていた。和田は不思議に思った。他には誰もいないのに、なぜそんな目をするのか。

「先輩、どうしたんです」

「おかしいと思わないか」

「えっ？」

「この矢、誰が射つたんだ」

「犯人でしょう」

和田は言つた。

「じゃあ、どこから？」

「――！」

江藤にそう言われて和田は初めて気が付いた。

「密室だって」

警視庁捜査一課の富沢警部は初めてそれを聞いた時、馬鹿馬鹿しいようなあきれ返ったような気分になった。

「どういうことなんだ」

車を降りて富沢は、一足先に着いていた部下の佐々木警部補に尋ねた。

佐々木も当惑顔で、

「とにかく見て下さい」

と、先に立って現場に案内した。

死体はそのまま転がっていた。

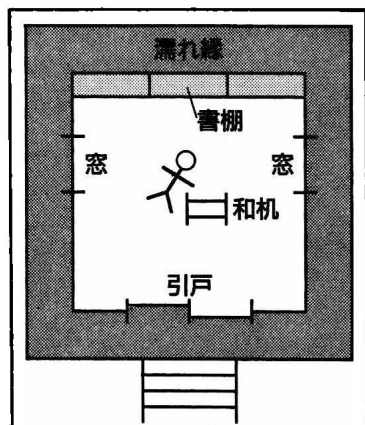
その胸には矢が突き刺さっている。

富沢は部屋を注意深く観察した。いま入ってきた戸口の他は出入口はなく、入って左右の壁には窓がある。右側の窓のガラスは割られている。

現場の状況を図示すると、下のようになる。

「第一発見者はパトロールか？」

「はい、外勤の和田巡査です。その前に通報があり



ました」

佐々木は答えた。

「通報？」

「ええ、被害者の友人で永源寺峻という若い男です」

「どんな通報だ」

富沢は身を乗り出した。

「この様子がおかしいから調べてくれ、というものです。本人、来てますよ。被害者の身許を
確認してもらいました」

「被害者の名は」

富沢の問いに佐々木は手帳を取り出した。

「日向忠太、三三歳、職業は古代史研究家ということですが」

「家族は？」

「独身で、郷里の宮崎に両親がいるそうです。連絡は済ませました」

「その男に会うか、永源寺とかいう」

「こちらです」

佐々木はいったん外へ出た。富沢もあとに続いた。永源寺峻という男は、外で待っていた。九月とはいえ、ことしはまだ充分に暑い。その男はポロシャツにスラックス、スポーツシューズという軽装だった。背は高く瘦せて、浅黒く日に焼けている。

「捜査一課の富沢です」

「永源寺です」

峻は軽く頭を下げた。

表情は暗く、声も元気がなかった。

「あなたが110番通報して下さったそうですね」

富沢は手帳を取り出して質問した。

「ええ」

峻はうなずいた。

「そのところの事情を詳しく話して下さい」

「ぼくにもさっぱりわからないんです。ただ、一時間ほど前に、ぼくのところへ電話がありました。一言だけ話したあと、苦しそうなうめき声をあげて話がとぎれたんです。電話を切ったわけでもなく、電話口の向う側で急に倒れたような感じだったので、一度電話を切って110番通報したわけです」

峻は説明した。

「それは二時頃ということですか」

「ええ、ベッドサイドの、電話のすぐ近くに時計が置いてありますので、確か二時ちょうどぐらいでした」

「急に倒れた、とおっしゃいましたが、その時被害者は矢で射られたんだと思いますか」

富沢は肝心な点を聞いた。

峻は首を振った。

「いえ、別に悲鳴を急にあげたという感じでもなかったし、ぼくは何か体の調子が悪くなって倒れたように感じましたが」

「じゃ、119番の方がよかったです」

「そうですね、ただ、彼は御覧の通りの変り者で、一人暮らしですし、警察の方がちゃんと調べられると思ったんです」

「なるほど、それで先程被害者と話したと、言いましたね、それはどんな内容です」

峻は困ったように、

「それが正確に言うとか話はしていないんです」

「会話はしていない？ それはどういうことですか」

「彼はまずこう言いました。ヒミコは殺された、と」

「ヒミコ？ いきなりそう言ったんですか」

富沢は驚いて言った。

「ええ」

「名前も名乗らずに？」

「ええ、そうです。あいさつもなしに、いきなりです」

「それでよく被害者だとわかりましたね」